

## 2020年9月30日実施 ハンセン病講義 感想

A 私は今回の話を聞いて疑問に思ったことがあります。それはハンセン病問題の根本にある差別は無くなったのかどうかです。

問題となった法律は改正され隔離も廃止されましたが施設から出て生活している人はほんの少しです。そしてその理由としてまた差別されるのではないかという恐怖も挙げられていました。差別された側には今でも恐怖心が残っているのです。私はこの事実を知って、法律が変わったとしても人の気持ちを変えることは難しいのではないかと思います。では当事者以外の人たちにはハンセン病患者を差別するような気持ちは無くなっているのか。私は無くなっていないと思います。ハンセン病の差別が広まった原因は国が行った強制隔離や無らい県運動です。これによって人々はハンセン病に対し怖い、恥だという印象を持ってしまいました。一度持ってしまったイメージを変えることは簡単ではないと思います。私はハンセン病は治る病気で感染もほとんどしないと知っている今だから差別をしないと断言できるけど、もし当時のような家が消毒される様子や強制的に連れて行かれる様子を目の当たりにしていたら同じことを言えるか自信が持てません。

現在は新たなハンセン病患者もいないためそもそもハンセン病を知らない人が増えてきています。私もこの授業を受けていなければ知る可能性は低かったと思います。でももっと多くの人を知るべきです。今後同じようなことを繰り返さないために、この問題は過去のこととして忘れてしまっただけではいけないと思います。現在世界中ではコロナウイルスが流行しています。それによって医療従事者や感染者が差別を受けているという報道を見ました。またアメリカの大統領が China virus と発言しているのを聞いて中国に対する差別が広がるのではないかと不安になりました。しかしそれと同時に差別はやめようという声かけも多く発信されてきました。例えば日本では政府が「人権への配慮について」という30秒ほどの動画をテレビで放送していたり、コロナウイルス治療が終わり番組に復帰した司会者を暖かく迎えているシーンなどがありました。確実にハンセン病のときより感染者やその関係者に対する差別が減っています。歴史は繰り返されていません。

ハンセン病問題で学んだ教訓をこれからも忘れてはいけないと思います。そして今回のコロナウイルス流行で差別を止めるよう声かけがあったように、差別に対して無関心でいるのではなく敏感に気づけるようにいるべきだと思います。

B 今回、資料館の方から聞いて私たちは知識を持っているだけではなく、持っている知識を周囲の人々が誤解せず、正しい知識を広めるためにどのように使って、行動するかということの大切さを感じました。黒髪小学校の話が私の中では非常に印象的でした。第三者からするとなんで受け入れてあげないんだろう、ひどい人たちだと思ってしまいます。しかし、現実的にみると当事者になってみなければ分からないことがたくさんあるのではないかと思います。そして、逆にあらゆる知識が溢れるとその知識が弊害になりかねないのではな

いかと思います。様々な情報を与えられるとどれが 1 番信用できるのか私たちは無意識に選択をして、自分にとって悪いことを避けるためにどうしても最悪の想定をして拒絶してしまうからです。知って解ける誤解もあれば、より深まってしまうこともあるのだと感じ、私たちはどの知識を得るのか改めて考えなければいけないと思います。

また、療養所の中での結婚についてのエピソードは本当に胸が張り裂けそうになりました。逃がさないために結婚は許す。だけど、家庭をつくることはできない。この矛盾が私はなんて残酷なのだろうと思いました。桜井さんは小さい頃から療養所にいてずっと両親にも会えず寂しい思いをしてきたのではないのでしょうか。結婚という希望を抱いたのにもかかわらず、子供が自分の目でその小さな命の灯火が消える瞬間を目の当たりにしなければいけないのは私たちには想像できないほど苦しいものだったと思います。

「死んでからも差別を受ける」その言葉が私の脳裏に深く刻まれています。家族との縁を切って療養所にやってきて、死んでも家に帰ることが許されず人知れず死んでゆくのはどんなに辛いものでしょか。忘れられてしまうかもしれないという恐怖。それは私たちが感じるのは非常に難しいことです。しかし、私たちにできることは彼らがこの世界で私たちと同じように生きていることを忘れないことです。忘れないこと、理解すること、それは簡単だけれどとても難しいことだと思います。しかし、一人一人が行動することがきっと彼らの心の支えになるのではないのでしょうか。自分たちがいることを誰かが理解し、認めてくれるということはきっと希望になると思います。私は、人生の可能性を奪い、人の人生をあつという間に歪めてしまう差別をなくすことは難しくても少なくして、彼らが家族と最後の時まですごして、自分を隠さないで一緒に笑い合える世界になるように正しい知識の輪を広げていきたいです。

C 今回、一番問題なのは人々のハンセン病への偏見を生むことになった、政府の対応だと思う。文明国への仲間入りをするためにハンセン病の人を隔離し、偏見を持たせるのは間違っていると思った。ハンセン病を社会に広めないように、ハンセン病の人たちの人権を無視したような行いを日本がしていたということに衝撃を受けた。昔の療養所は環境がひどく悪く亡くなった人や症状を悪化させてしまった人がいると聞き、いかにハンセン病のひとが苦勞してきたかがより伝わってきた。また、療養所を「ここで死んでもらう場所」と言っていて、昔の人々のハンセン病患者に対する思いが現れていると思った。ハンセン病を治す薬が開発されてもなお隔離し続けた政府の行いは元ハンセン病患者の方々の人権を犠牲にしているのだと思う。

ハンセン病にかかって、療養所に入所する際に家族との縁を切る人が多くいて死んでも家族と再会できない人もいることがすごく悲しかった。療養所にあるお墓に入る人が多く、死んでも差別が続くと言っていたが、自分の家族との離れたままになることはとてもつらいことだと思う。ハンセン病自体の感染症としての問題はすでに解決していても、ハンセン病にかかってしまった人の抱えるものはずっと残り続けている。桜井哲夫さんの話で、療養

所のなかで結婚して子供ができたものの、ハンセン病のひとの子供はみとめられていなかったがために、自分の子供がだんだんと衰弱していく様子を見守るといのは私たちには想像できないほど悔しかったのではないかと思う。ハンセン病の方たちに対する理不尽なルールはその人の生き方を大きく変えていることが桜井さんの話で分かった。

政府のように前に立って導いていく立場にいる人たちが間違っただけの情報を発信することは決してあってはならないことだと思う。また、人々の人権をも侵してしまうような行動は相手かどのような人であれ、おかしいと思う必要がある。いま、コロナウィルスが大流行していてコロナにかかってしまった人への批判やいじめがあると聞くと、その行いがその人の権利や人生を傷つけてはいないか、一度考えてほしいと思う。ハンセン病が流行った当時より医療技術も発展している分、ハンセン病患者に対するような差別は起こりにくいかもしいけれどインターネットなどの技術も進んだ分あらゆる情報が入ってくるので少し不安にも感じる。世の中の流れが少し傾くだけで、だれかの人生を壊すこともできることが怖いと思った。

D ハンセン病患者に対する差別について、国が打ち出した政策のせいであるということがよく分かった。一番驚いた政策は、療養所の中では所長の権限で患者を罰することができるというものだ。しかも理由が、警察や裁判所が関わることを拒否したというから信じられないと思った。

今、コロナウィルスが大流行しているが、ハンセン病の歴史から学ぶことがたくさんあると思う。一つ目は、病気についてよく知ろうとすること。ハンセン病は実際、感染力が弱く、感染しても発症することが少ない。だから、本当は政府が行っていたような大規模な隔離は必要のないものだった。コロナに関しては、まだわかっていない部分も多いが、だからこそ確定していない情報に惑わされてはいけないと思った。二つ目は、患者は悪くないということだ。ハンセン病の患者は、感染しているということだけで、犯罪者のように扱われた患者の方たちの人権は完全に無視されていた。しかし、コロナ警察という言葉ができてしまったように、感染した方を異様に非難し、犯罪者のように言いふらす。これは実際現代の日本で起きていることである。かかってしまうことはもう防ぎようがないような状況の中で、感染した方をよってたかって罵倒することは許されないはずだ。私たちがハンセン病の話や歴史上で起こった話を語り継いでいくのは、その問題自体の根本的な解決ももちろんあるが、今後似た状況に置かれたときにどのように行動するべきなのか、参考にして考えるためだと思う。コロナウィルスが世界的流行しているときに、ハンセン病についてのお話を伺って本当に良かった。自分の行動を振り返るきっかけにしたいと思った。

また、一番胸に刺さったのは、「差別は自分のことになったときに、姿を現す」という言葉だ。聞いた瞬間、自分は大丈夫だろうか本当に怖くなった。国際高校に入学してから、さまざまな差別について考えることが増えた。しかし、実際に自分が自分自身の行動に考えを生かしているのかに自信が持てなかった。心当たりがないことは、良いことかもしれないが、

それは“無意識”に差別が行動として出てしまっているかもしれないという可能性もある。人間は結局自分が一番かわいい生き物だと思うから、偏見や嘘の情報を信じ込んで、自分を守るという名目で他人を傷つけたり、他人の人権を侵害してしまったりするのだろう。しかし、それが許されるはずはない。自分を守ることは確かに大切だ。だからこそ、正しい知識をもって、自分が加害者にならないように、自分とは違う、他人を知って認めていくことが大切だと思う。

E 私は、今回のお話を聞いて感じたことが2つある。1つ目は、今回のお話でいう“政府”のような、私たちに大きな影響を与えることができる力を持った組織がむやみに情報を流すべきではないと言うことだ。ハンセン病は恐ろしい伝染病だと言うことを大々的に広め、患者の意思すら関係のない隔離を無理やり公の場で行ったりしたこと、のちに治る病気だと言うことが判明したにもかかわらず隔離を続けたこと、当時の政府がこのような対応をしてしまったために、国を実質的に動かしている国民がこれに便乗し、結果的にその後何十年と続く差別を生み出してしまった。文明国の仲間入りをするには屋外で生活を営むハンセン病患者は恥だと言う愚かな考えから行われた隔離、知識の“ち”の字も見当たらない対策方。国を動かす人々に一番大きな影響を与える組織の体制が、このようにずさんであってよかったのだろうか。

2つ目は、すぐに周りに流されてはいけないと言うことだ。1つ目のところで話したように、ことの発端である原因を作ってしまったのは政府だが、それを“普通のこと”に変えてしまったのは当時の国民である。そしてここでとても心に響いた言葉が、“科学(正しい知識)が感情に負けてしまった”“差別は自分のこととなった時初めて姿を現す”という中山映画監督の言葉だ。中山監督は、実際にハンセン病の患者を親に持つ子供たちに対する小学校入学拒否を在校生の保護者が訴えた龍田寮事件を間近で感じた人物だ。当然、ハンセン病は遺伝によるものではないので、たとえ親が患者だとしても、その子供に大きな影響があるわけではない。その時すでにハンセン病は治る病気であること、薬まで開発されたことが公になったにもかかわらず、科学は感情に負けてしまったのだ。

私たちが生きている今この時代は、科学に対しての絶大な信頼があるため、そのようなことは起こらないであろう。しかし、インターネットが発達し、SNSを誰もが気軽に利用できるようになり、情報が数秒単位で行き交い、拡散される世の中であるからこそ、私たちは根拠のない情報をむやみに信用してはいけない。私は正直、ハンセン病問題が実際に起こっていた時代よりも、今私たちが暮らす時代の方が恐ろしいと思う。すぐに人を傷つけることもできるし、自分を正当化することもできるし、正しい情報をいろんな人に拡散することもできるし、人を殺してしまうことだってできてしまう。

私たちが本当に気をつけなければいけないことをたくさん学べた授業だった。

F 私は今回の講話の中で、「らい予防法」が制定されていた頃、すなわちハンセン病に対す

る差別がもっとも酷かった頃の状況を画像などで見て、本当に大勢の人々がまるでまったく当たり前のことのように差別運動をしていたことに衝撃を受けました。ハンセン病患者を親に持つ子供たちが、自身はハンセン病なわけでもないのに一般の小学校に入ることを拒絶されている光景が、とても奇妙でした。また、お話の中で「正しい知識が感情に負けてしまった」という言葉があり、これは今この時代に起こっているどんな差別にも共通していることなのではないかと感じました。最近では黒人差別に対して意識が高まり、black lives matter と呼ばれる運動も活発化し、黒人差別の始まりの歴史や現状などの情報も多く発信されていました。そして、そうして正しい知識を学んでも差別がなくなるのは、頭では全ての命が平等であることは理解していても、それでもこれまでの暮らしの中で黒人を下に見るような感情が根付いてしまっているからなのだと考えます。だからこそ差別を無くすためには正しい知識だけでは不十分であり、当事者の立場になって考える機会が大切になってくるのではないのでしょうか。

そしてやはり、このように人々がなんの抵抗感もなくハンセン病患者、そしてその家族に対して差別行為をしてしまったこと背景には、政府が間違った知識に騙され、そして国民を騙してしまったことが一番の原因だと思います。現代はインターネットの発達によって、簡単に情報を探すことができます。これは、正しい知識を知ることが簡単になったと同時に誤った情報も目に留まるが増えたということです。だからこそ私たちは、誤った情報によって引き起こされたハンセン病に対する差別を教訓にして二度とこのようなことが起こらないように、このような時代だからこそより一層「情報」というものの不確かさを再確認して、「情報」に対して神経を使っていかなければならないと感じました。

さらに、「国」による差別はこれだけに留まらず、ハンセン病に対しては法をも無視することがありました。このようなことがこれから先も起こる可能性は残念ながら十分にありません。このようなことにならないためには、社会が政治や今起こっていることに関心を向け、世間一般の常識が必ずしも正しいと思いません、自らの意見をしっかりと持つことが必要であり、私もこれから先はより一層自分の意見を持つように気をつけていこうと思います。

G 今回の授業ではハンセン病に感染している人についての話を聞くことができました。今回の授業を受ける前では、ハンセン病に感染している人への差別についての事前学習があったので、差別されていることは知っていましたが、こういった内容の差別、どのようなひどいものなのか、詳しくはわかりませんでした。今回の授業では具体的な差別の話を聞くことができたので、とても勉強になりました。さっきも言った通り、差別についての具体的なものは知っていませんでしたが、ある程度は予想しましたが、しかし今回の話を聞いたとき、はるかに予想を超えるような、全国で非人道的な差別が行われていることを知りました。こんな差別がもし現代の社会で行われていたら、必ず反対する人が出てくるだろうと思っていましたが、授業が終わった後よく考えてみると、こういった差別が起きたこと、これはただの時代の移り変わりで解決できるようなものではないと思いました。もちろん時代背

景を考慮すべきではないわけではありませんが、昔だからこういうことが起きたという考え方はよくないのではないかと思います。今のコロナウイルスのように、こういった差別は現代の社会でもまた出てきています。多くの人は差別はよくないと思って入ると思います、しかし、差別の行為をしている多くの人は、自分が差別していると思ってはいないでしょう、それはなぜかと言ったら、メディアや噂などの印象操作によって、自分のやっている差別をあたかも正当化しているからなのではないかと思います。ハンセン病に感染している人が差別を受けた時代でも、きっと差別はよくないということはみんな知っていたと思います、しかし国の政策によって、差別をすることが当たり前になったから、そのようなひどい歴史を創り出してしまったと思います。私たちが得る情報、これらすべてが正しいわけではないと思います、それはすべての情報発信源に言えることだと思います。インターネットも国が発信する情報も、では何を信じればいいのか、私は何を信じてもよいと思います、大事なのはそこではなく、どの情報を信じたとしても、その情報を当てにして何らかの行動を行うとき、その行動がしてはいいものなのかを考えるべきだと思います。他人が悪いからといって、それが自分が悪いことをしていい言い訳になるわけではありません。今を生きる私たちには、過去の歴史に償うものはないと思います。私たちはそういった歴史を繰り返さぬように努力をしていく義務があると思いました。

H 今回はハンセン病の方々に対する差別についてお話を伺いました。ハンセン病については、小中学校でも少し学んだことがありました。なので、政府の政策によってハンセン病患者が強制的に隔離されたり、人権を脅かされるような仕打ちを受けていたことは知っていました。そんな中で今回お話を聞いて思ったのは、ハンセン病の方々を受けてきた差別の悲惨さと差別をなくすことの難しさです。

ハンセン病患者は、治らない病気であったことと、病気による外見の変化によって必要以上に恐れられてきた歴史があります。また、国家権力までもがハンセン病患者を強制的に隔離する政策をとり、ハンセン病患者に対する人権侵害を行いました。それによってより差別は色濃くなり、隔離政策が廃止された今もハンセン病に対する差別や偏見は残っています。

お話の中で自分が印象に残った差別の例としては、療養所で決まりを守らない患者を監禁室に閉じ込めるというものです。この監禁室への幽閉は、裁判もなく療養所の所長の権限で決定でき、監禁室の中で死んでしまう人もいたというのはハンセン病患者をあたかも犯罪者のように扱っていてハンセン病に対する差別の悲惨さを物語っていると思いました。

そして、ハンセン病患者への差別を安全になくすことの難しさも感じました。政府による隔離政策は撤回され、またハンセン病は今ではもう治る病気です。それでも差別や偏見がなくなるのは、やはりハンセン病に対する知識不足と相手の人権を尊重しようとし、それを行動に移すことの難しさがあると思います。ハンセン病療養所に付属する保育所の児童たちが小学校に入学することに対して反対運動が起きたのもそうですが、ハンセン病をよく知らないが故の恐怖と、頭ではわかっている行動には移せない人間の弱さが差別、偏見

がなくならない要因なのだと思います。私たちがハンセン病患者を受け入れるためには何が必要なのでしょうか。それは、ハンセン病についての人権教育や啓発に取り組むことはもちろんですが、ハンセン病について知った上でその立場に立って相手の気持ちを考えることだと思います。ハンセン病の人々が受けてきた差別、例えば療養所に入れられた時点で家族との縁は切れ、死んだ後も同じ墓に入ることができないことを想像してみると、その苦悩がよく分かるのではないのでしょうか。私たち一人一人が想像力を働かせることで、ハンセン病患者、そしてその家族の方々が受け入れられる社会が作れるのではないかと私は思います。

Ⅰ 今回、ハンセン病資料館の方のお話を聞いて、ハンセン病差別の現代までの闘いを学んだ。もちろん、患者以外にも行ってはいけないが、強制収容や療養所独断の重監房行き、家族との繋がりを完全に切らなければいけない状況を、治療を受けるべき患者に与えていたことが信じられなかった。

さまざまなお話の中でも、特に真理子曼荼羅の話がとても印象に残った。

奥さんの手術を手伝ったことに加えて、死ぬ運命にある娘と会うなんて、桜井さんはどんな気持ちで真理子ちゃんを10時間抱き抱えていたのだろうか考えると胸が痛くなった。遺伝する病気でもないのに、間違った認識、偏った考えのせいでハンセン病患者に断種、中絶を強制されることが日本で起きていた。また、それによって生まれることすら許されない子供達ができるしまうことに怒りを感じた。

療養所が、本来の意味とは真逆の「患者に死んでもらう施設」として運営されていて、患者に仕事をさせたり、重監房に入れたりしていたのは、当時の社会がハンセン病患者を腫れ物扱いしていたことが原因だと思った。

今回の授業でも、話を聞いているだけだと「自分は差別することはない、なぜ差別をしているのだろう」と思い込んでしまうけれど、それが本当かは当事者になってみないとわからないということに気付かされた。国によって「らい予防法」が定められた社会で、もし私が当時の人だったら他の人と同じように差別をしていたのだろうなと思った。今、自分自身で常識だと思っていることが、誰かを傷つけているのではないかと考え直すきっかけとなった。

小学生の頃に話を聞いた時とは違ってただただ酷いと思うよりも、国の事情や間違った情報で人々が差別を当たり前に行っていたことが怖いと思った。

また、国がハンセン病差別を助長したというのを聞いてから、必ずしも世間や国、大勢の人が言っていることが正しいわけではない、ということが改めてわかった。これから、周りの風潮にただ流されるわけではなくて、本当に正しいことなのか考えながら生活したい。被害者の失われた時間や人生戻ることはない。患者はもちろん、その家族や墮された子供、たくさん被害者を産んだハンセン病問題は決して忘れてはいけない歴史であり、今なお続く問題だと思う。さらに、コロナが流行しているなかで、患者の特定や差別が起こりつつある

今、ハンセン病問題をもう一度知って、過ちを繰り返さないことが大事だと思った。

J 私は中学生の頃に国立ハンセン病資料館に行ったことがあり、このように講義を受けるのも3回目だった。しかし、何度聞いても涙が出そうになる。それは桜井哲夫さんの体験談だ。校内に配られた資料や事前学習で患者さんの間でできた子供は全て中絶の末ホルマリン漬けにされることは知っていた。その時はただただ「なんて酷いことをするんだろう」とかわいそうに思っていた。しかし、桜井さんの体験談を聞いているうちにその気持ちが失せた。「かわいそう」「残念だ」そんな他人事のような言葉で表せるようなことではなかったからだ。子供を失うことは親にとって何よりも辛い。そんな思いを、自分も間接的に関係しつつ経験してしまった桜井さんの詩は、いつも私は涙を流さないように堪えながら聞いている。桜井さんの話は毎回次のような話で締めくくられる。「真理子を殺したのは誰か、それを考えてほしい」中学生の頃の私はそれを「差別が殺した」と考えていた。しかし、高校生になり多くの経験や知識を得た今、私は「社会が殺した」とも考えられると思う。ハンセン病になることが恐ろしく汚らわしいことだと社会全体が差別を黙認してしまったこと。また、大人と子供（学校内など）の二つの社会で差別がはびこってしまったこと。この二つの事実から、真理子ちゃんだけでなく多くのハンセン病患者を苦しめたのは他でもなく社会そのものだと私は考える。

病気への偏見から始まった差別。これは今のコロナでも同じことが考えられる。医療関係者や患者、又はその家族。彼らは今、差別の対象として扱われてしまっているのだ。これはすでに形として出てきている。四国の徳島県では、感染者の家に卵や石が投げられたり、「コイツは感染者だ」と差別的な内容の張り紙がされている。また、県外ナンバーの車へ煽り運転や器物損害も横行している。日本赤十字社が発表した「コロナの後」という動画に次のような言葉がある。「コロナの後に来るもの。それは『恐怖』感染することへの『恐怖』や周りに知られることへの『恐怖』は差別を生み、無用な殺生を生む。これはハンセン病患者への差別から分かることだ。病気への『恐怖』は社会を狂わすだけでなく、人々の心の中さえも破壊してしまう。

差別というものは普段はよく見えない。しかしいざその対象を目の前にすると表面に出てくる。それはハンセン病だけでなくコロナと戦う今のことも指している。過去の過ちを繰り返さず、桜井さんのような経験をする人がもういないように、私たちは病気への差別に立ち向かうべきだと私は思う。

K 「死んでお墓に入ったら親子3人で仲良く暮らしたい」この言葉を聞いた時、胸が張り裂けそうな思いになった。8歳のときから父親と離れて暮らさなければならず、周りの人から白い目を向けられ、精神的、身体的に追い詰められていく母の様子を目の当たりにする辛さや苦しさは私が到底理解できるものでも、簡単に辛そうといえるほどのものではない。何がこの家族をバラバラにしたのか考えた。私はどうしてもハンセン病が原因だとは考えら

れなかった。風やインフルエンザにかかったからといってここまで家族は追い詰められることはないに等しい。差別が真の原因だ。周りの理解、知識不足だけに留まらず、国が間違った政策を行ったため、ハンセン病患者とその家族は苦しめられてきた。今までのハンセン病の歴史を辿ったとき、なぜこれを誰もおかしいと思わなかったのか不思議に感じるほど杜撰な制度、劣悪な環境下におかれていた。これだけでも十分酷いが、これだけに留まらず行く先々で差別され、同じ人間として対等な扱いを受けられなかった。このことを国が助長していたと考えるとあまりにも悍ましい。そして、差別は自分のことになったときに姿を表すという言葉にも共感した。私はすべての差別をなくす事は不可能と考えている。お話にもあったように他人事であり第三者のことであればいくらでも綺麗事は言えるが、実際自分のこととなると知識や理性よりも感情が大きくなり差別をしてしまう。そして差別されるつらさは経験した人にしかわからない。実際、常にマジョリティの中にいる人の中では一度も差別された経験がない人もいる。しかし、解決できないから無視する事は間違っている。知識がなければ学習すれば良い、経験が無ければ経験者を通して間接的に体験すれば良い。どんな理由も差別を許容し、黙認する理由にはならないと考えた。それと同時に今まで、自分自身もハンセン病とその差別についての知識が無く、関心を示さなかったことを反省した。今回の講演を通して学んだことを、ただ「知った」で終わらせるのではなく、より深く考えるために実際に国立ハンセン病資料館に足を運んだり、インターネットや本で詳しく調べたりなどの行動を起こしていきたいとおもった。頭で理解して終わらせるのではなくその先に繋げていくことの大切さを学んだ。私たちひとりひとりがそうすることで差別によって苦しむ人が少しずつ減るだろう。「何事も自分ごととして捉える」このことを念頭に置いて、差別問題や人権問題について考えていきたい。